

黙して知る恵み

丸山 勉

【聖書】 コリントの信徒への手紙二 12章 1～10節

わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。彼は楽園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるように、わたしは三度主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

【序】 自由な者

今日で、コリントの信徒への手紙を礼拝で味わうのも一応一区切りとなりました。来週からはしばらく旧約聖書(創世記や士師記など)からご一緒に味わうこととなります。コリントの信徒への手紙(一、二)の著者はパウロですが、今日の御言葉には、そのパウロがその伝道者としての生涯で、恐らく最も伝えたかった御言葉の一つが含まれている箇所ではないかと思えます。

その御言葉というのは、12:10の、パウロが、祈りの中で神様から示された御言葉です。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」という言葉です。昔の文語訳聖書ではこの初めの部分は、「わが恵み、汝に足れり」という、印象の強い響きで記されていました。

この言葉を神様から聴いて、パウロは本当に自由な者とされたのだと思えます。その自由というのは、一言で言うならば、自分自身の惨めさも、或いは病気と思えるものも、どうしようもない弱さというものも、自ら受け入れて生きていく、そのような「自由」だと思えます。それはとても大きな「福音」の力のゆえなのだと思います。今朝、そのことをご一緒に見て参りたいと思えます。

【1】 パウロという人

パウロという人物がこの世界で果たした役割というのは、誰も真似が出来ないような大きく、偉大なものであったことは間違いがありません。けれども、その人物像はどうだったのでしょうか？かなり個性が強い人物だったと思います。誰からも好かれるような人物というより、実際周りにはパウロに反感を持つ人たちも多かったようです。使徒言行録を読むと、イエス様を伝道する、同じ志を持つ仲間でも、たとえばバルナバなど、いつも考え方が一致している訳ではありませんでした。

もちろん頭も切れるし、並外れた行動力と、また頻繁に教会や同労者に手紙を書き、その内容もとても深いわけです。何よりイエス様に救って頂いたその確信に立ち、何者も恐れなくて前進するその姿勢に対して、多くの人が驚きながら尊敬していたと思います。けれども、そのようなパウロですけれども、意外にと言いますか、**繊細な、デリケートな心**も持っていたのではないのでしょうか？

このコリントの信徒への手紙で、パウロは「資格」という言葉を幾度となく書いています。主の伝道者としての「資格」です。それは周りの人たちから、「あいつは正式な弟子ではない。それどころかキリスト教会に対して迫害を加えてきた人間ではないか」という声をいつも聞いてきましたから、「資格」という言葉は胸に刺さって聞こえてきたのではないかと思います。「あいつなんか…」という陰口や反感は、パウロの心を悩ませることも少なからずあったと思うのです。

しかしパウロ自身は、自分の伝道者としての**資格**は、人間が与える資格ではなく、「**神から与えられたものです**」と前に読んだ3章の所(5節)でハッキリと確信を持って語っています。けれども、そのように自分が神様から召されていることを思えば思うほど、彼は、反感の声にひるまず力強く伝道をしていきたいと思ったと思います。しかし、そのような自分の中には丸でそれを妨げるような「**とげ**」が**与えられた**、とこの12章でパウロは記しています。この「とげ」とは一体何なのでしょう？

[2] パウロの中の「とげ」とは？

パウロ自身はハッキリ書いておりませんが、彼の身に与えられた「とげ」の内容について、様々な解釈があるようです。パウロはそれを「**サタンから送られた使い**」とさえ言っています。サタンの目的というのはただ一つ、神様の働きを妨げることです。パウロにとって、この「とげ」がなければもっと神様の働きに邁進出来るのだけれど、これがあるお陰でブレーキがかかる、と愚えてしかたがないものを抱えていたということなのでしょう。

それは、例えば**てんかん**のような発作の症状であったという説、**目に病気**を持っていた、という説、或いは**皮膚病**を患っていたのかもしれないという説があるようです。もしかしたら複数の症状を抱えていたかもしれません。けれども、ここで思うことは、パウロも、肉体を持つ一人の人間として、**自分ではどうすることも出来ない弱さや辛さ**に直面させられることが、私たちと同じようにあったということです。

パウロは、それを「**離れ去らせて欲しい**」と神様に祈った、と言います(8節)。「神様、何故ですか？あなたは私をお使い下さるために私をあのダマスコへの道で捉え、伝道する者へと造り変えて下さったではありませんか！そのあなたでしたら、この肉体のとげを取り除くことはたやすいことではありませんか、そうであれば私はもっとあなたのために働けるではないですか！お願いです、この病を取り去って下さい。」—そのように祈ったのではないのでしょうか。

彼パウロはここで「**三度主に願いました**」と書いています。きっとこれは単に数の問題ではなく、それほど真剣に、神様の胸ぐらをつかむ様にして、戦う様な祈りを繰り返した、ということでしょう。その中ですぐに答えが聞こえてきた訳ではないと思います。私たちにも経験があるのではないのでしょうか？「祈りすれど手ごたえなく」という歌もありますけれども、ある意味、空しさを覚えるような時間を過ごしていく最中で、私たちは祈る自分そのものが、もしかしたら何か**神様に対して勘違い**をしているのではないか、という示しを頂くことがあります。

私は思うのですが、パウロはこの祈りの中で、ただ願うだけではなく、恐らくその祈りの最後は「**主よ、語り**

たまえ、僕は聴きます」という、ひたすら聴く祈りに導かれていったと思うのです。その中で気付かされたこと、それはパウロ自身が書いていますが、「とげ」が自分に与えられているその意味です。それは「思い上がらないように」、即ち高慢にならないために与えられたものだったということです。

これは大きな発見ではないでしょうか？ 祈る自分自身が、神様から問われているのです。「お前はわたしに願うだけで解決しようとしているがそれでよいのか？」と。パウロはそこで感じたのではないのでしょうか。— 全く痛みや辛さが無い人生で神様をお伝えする働きは出来ないのではないかと、何も妨げがなく事が運ぶ時、「これは私の実力で成し遂げたものだ」と、人間は愚かにも高慢になるのですね。そこでは、神様の存在は自分の踏み台になってしまっているのです。神様の上に自分が立ってしまっています。そのような祈りのやり取り—沈黙の中での対話—の中でこそパウロの耳に、いえ、魂にハッキリと聞こえてきた言葉がありました。それが一番最初にご紹介した御言葉です。

「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」。

[3] パウロと、ゲツセマネの祈り

このパウロの祈りは、あの主イエス・キリストの「ゲツセマネの祈り」を思い起こさせるものだと思います。主イエスも、あの十字架にお架かりになる前夜、ゲツセマネの園で真剣に、ご自身の額から汗を血の滴りの様に流しながら、神様にぶつかっていったのです。それこそ、「三度」、同じ言葉で祈られました。マルコによる福音書にはこのように記されています。

イエスは地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもお出来になります。この杯を私から取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」。(マルコ 14:35～36)

わたしは改めてここを読んで恐くなりました。主イエス様はギリギリの祈りをあの時・あの場所ですて下さったのだなと思いました。私はどこかで「イエス様は神様の独り子なのだから私たちを十字架で救って下さるのは当然だ」と思っていなかっただろうか？—実は逆だったのです。

あそこでイエス様は、十字架に架かる事を回避することが出来ただ一人のお方だった筈ではないか、と思います。何故かと言えば、全く罪のないお方だったからです。神の子が十字架で殺されるなどというのは理不尽極まりないことではないでしょうか!? だから、主も、初めは「アッバ、父よ、あなたは何でもお出来になります。この杯を私から取りのけてください」と祈られたのです。けれども、その願いを貫くことはありませんでした。では何を貫かれたのか。ただ神様のご意志が、ご計画が成ることをお選びになったのです。「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と。恐ろしいことがここで決定したのです。神の御子が、私たち罪人の身代わりとなって審かれることです。ご自分が裁かれることよりも、私たちへの愛を優先させて下さったのです！ そうでなければ、私たちはもう滅ぼされてもおかしくないのです。ギリギリの祈り、というのはそういうことです。

パウロは、あの神様との格闘の祈りの中で、きっとこの主イエス様のゲツセマネの祈りを思い起こしたのではないかと思います。そしてその中で自分の肉体の「とげ」が、主イエスのあの犠牲に比べれば何ほどのものだろうか！との思いに導かれたのではないのでしょうか。それどころか、あの主イエスの十字架の大きなご愛によってこんな自分が赦され、受け入れられ、かつ用いられている事実にも、もう言葉がなくなったのではないのでしょうか。

主は十字架の上から腕を広げるようにして、その時パウロに語って下さったのではないかと思います。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」。「とげ」もまた、それが弱い部分であるがゆえに神様の救いを必要とする。キリストの力は弱さの中でこそ十分に働くのだったら、この「とげ」の存在と共に私は生きていこう、とパウロは思ったのではないのでしょうか。これを「自由」と言わずに何を「自由」と言えばよいのでしょうか？

[4]「わが恵み、汝に足れり」

パウロはこの12章で、「わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っています」と言い、その人が体験した神秘的出来事を紹介し、「このような人のことを私は誇る」と言っています。その人は「**第三の天まで**引き上げられた」と言っています。第三の天と言うのは、**神様の御座がある所**、という表現のようです。肉体を持ったままか、或いは一種の臨死体験のようなものか分かりませんが、パウロはまた言い換えて、その人が楽園(パラダイス)にまで引き上げられ、神様か或いは御使いの言葉を直接聞くような体験をしたと言っています。

多くの学者は、この人物とはパウロ自身であろうと言っています。もしパウロ自身がその体験を強調して自分が神様から特別選ばれている存在だと知らしめることをしたいのなら、もっと具体的に、そして「私は、私は」と言うでしょう。けれどもパウロがこの話をここでする意味は、そんな体験は、その後私が経験した、**主の御言葉を確かに全身で受け止めた経験に比べれば全く大したことではないのだ**、ということを示すためなのです。

パウロはハッキリ言っています。12:5 です。「このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、**弱さ以外には誇るつもりはありません**」と。パウロは、いくらでも誇ろうと思えば、誇るものが沢山あった人物です。家柄、高い学歴、ローマの市民権、また神秘的体験などなど…。けれども、パウロは、主イエス様と真実に出会って、そんな己にこだわること、或いはこの世が賞賛するであろう価値を、塵芥、或いはふん土のように捨てたのです。イエス様にあるがままの自分が愛されていることの、あまりの素晴らしさの故にです。

そうです、私たちはなかなか本当の意味で、「**あるがまま**」になれないで苦しんでいるのではないのでしょうか？私自身がそうでした。いつの間にか「これが人間として全うな基準」という物差しを自分で作ってしまっているのです。ほとんど無意識の内にです。それはひと言で言えば、「**比較**」の世界です。人間の幸せの「**偏差値**」を作ってしまっている、と言っても良いかと思えます。平均の偏差値以下は不幸だ、という価値観です。恐ろしいことだと思います。

—けれども、そんな私に向かって、私たち一人ひとりに向かって、主は今日語りかけて下さっています。「**私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で発揮されるのだ**」と！ここでの「力」とは、定冠詞が付いて、ザ・力、つまりキリストの力です。このキリストの力のもとにあって、**私たちは何ら力む必要はありません**。力んで生きる人生、それは自分自身から解放されていない生き方だと思います。「**比較**」の中で息をする私たちが、時に息苦しくなるのも当然かと思えます。

けれども、キリストにがっしりと捕えられたパウロはこう言うのですね。

[結]キリストを運ぶ「器」とされて

「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足していま

す。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」(12:9～10)

—何と**解き放たれた生き方**ではないでしょうか。「わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。」

どんなに八方ふさがりの状態にあっても恐れないどころか、**満足だ、満ち足りている**って言うんです。やせ我慢でパウロがそのようなことを言っているのではないことはパウロの生き方そのものが証していると思います。どんなに死ぬような目に遭っても、彼の存在はただ主イエス・キリストを持ち運んだ一生でした。いや、逆かも知れません。彼はイエス様によって持ち運ばれたんですね。

神様の恵みの力に覆われるとき、私たちの「**弱さ**」さえも、もはや弱さではなく、**私たちはキリストの力がその中に働く「器」とされる**のですね。この「**土の器**」を、神様は最後の最後まで、比べ得るものがない、たったこの世に**たった一つの尊い器**としてお用い下さる。そのことを喜び、この私自身を明け渡して生きたいと願います。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、聖なる御名を讃えます。

「力を捨てよ、知れ、わたしは神」(詩 46:11)と詩編の作者は言います。そうです、どうか色んなものを握りしめて、力んで生きている私たちです。どうか、手ぶらになって、あなたご自身と真向かうことができますように。

あなたの前に、高慢になり、またある時は卑屈になる、そんな自己中心に生きる私たちをどうか解き放って下さい。「わたしの恵みはあなたに十分である」との言葉をこの心、魂、体に、まっすぐに受け止める信仰を与えて下さい。そこに本当の自由が与えられ、また、人と人との間に真の平和が与えられていきますように。

私たちをあなたの愛の道具として自由にお用い下さい。

十字架で私たちを愛し抜いてくださった主イエス様の御名によってお祈りいたします。

アーメン。